

第四十節の隠された歴史 — 第九番

力、栄光、そして苦難

Jeff Pippenger

2026-05-06

ペテロはパニウム（カイサリア・ピリピ）にいるが、それは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブがイエスとともにただ彼らだけで出かけた三度の出来事の中間の、ちょうど六日ないし八日前に当たる。第一は、ヤイロの十二歳の娘の復活における主の力の実証であり、第二は、変貌の山における主の栄光の実証であり、第三は、ゲツセマネ、すなわち主の苦しみの実証であった。第十一章のパニウムにおいて、ペテロは第十六節の十字架の直前に位置している。その山は、三人の弟子だけに許された三度の旅の中間点であった。その山において、天の父もまた三度のうち二度目に語られた。すなわち、父はバプテスマの時、山の上、そしてその後、十字架の直前に語られたのである。ペテロは、三つの特定の出来事の間点に二度いるのである。また彼は、マタイの第十一章から第二十二章までの中間点でもある。

その驢馬は、主の勝利の行進において、王なる創造主ご自身を運ぶ栄誉にあずかかった。

山は、勝利の入城に先立って現れた。その勝利の入城は、ろばが解かれて、ささげ物をエルサレムへ運ぶことによって始まったが、それは、アブラハムのろばが、エルサレムの神殿の古代の所在地であるモリヤにおいて、ささげ物のための薪を運んだのと同様である。レビ記二十三章の流れにおけるラツパの祭りは、このろばが解かれることを示している。それゆえ、変貌の山の経験は勝利の入城に先行し、こうしてペテロを、ペンテコステの季節に対応するレビ記二十三章の三十日の歴史の中に位置づけている。その三十日の間に、八十人の勇敢な祭司たちの中に数えられる候補者たちの上に、神殿（中間の試験）が臨まされる。聖所におけるウジヤ王の反逆の証しにおいて、その八十人の祭司たちは勇敢であると特定されており、それは、これに加わらなかった祭司たちがいたことを示唆している。

祭司アザリヤは彼の後から入り、主の八十人の祭司たち、すなわち勇敢な者たちも彼と共にいた。彼らはウジヤ王に立ち向かって言った、「ウジヤよ、主に香をたくことはあなたの務めではなく、香をたくために聖別されたアロンの子らである祭司たちの務めです。聖所から出て行きなさい。あなたは不法を犯したのです。このことは、あなたにとって主なる神からの誉れとはなりません。」歴代誌第二 26:17, 18.

勇敢な祭司たちとは、小羊が行かれるところならどこへでも従う者たちである。

彼らは女たちによって汚されなかった者たちである。彼らは処女だからである。彼らは、小羊が行く所へはどこへでも従って行く者たちである。彼らは人々の中から贖われ、神と小羊とにささげられる初穂となった者たちである。黙示録 14:4

ユダ族の獅子は御民を至聖所へと導き、契約の箱を見つめさせ、そこで罪を塗抹する最後の働きに従事しておられる大祭司を熟考させられる。ペテロは2023年12月31日に復活し、その後、預言の外的幻を確立するうえでのローマの役割に関する基礎の試験に直面した。続いて、神殿に関する第二の試験がペテロに到来し、そこにおいて、内的な線の幻がダニエル書第十章の鏡の幻の中に表されている。

ペテロは2020年7月18日にその主を否認し、しかもそれを三度行った。

「ペテロは三度、公然とその主を否認した。そしてイエスもまた三度、彼からその愛と忠誠の確証を引き出し、その鋭い問いを、傷ついた彼の心に突き刺さる返しのついた矢のように、深く突きつけられた。集まった弟子たちの前で、イエスはペテロの悔い改めの深さを明らかにし、かつて豪語していたその弟子がいかに徹底してへりくだらされたかを示された。」『各時代の希望』812ページ。

ペテロは、礼拝者の二つの階級を代表していた。

「パリサイ人と取税人によって表されるそれぞれの階級のために、使徒ペテロの歴史のうちに一つの教訓がある。弟子となって間もないころ、ペテロは自分を強い者だと思っていた。パリサイ人のように、彼は自分の評価では『ほかの人たちのようではない』のであった。キリストがその裏切られる前夜、弟子たちに向かって、『あなたがたは皆、今夜わたしのゆえにつまずくであろう』と前もって警告されたとき、ペテロは確信をもって、『たとえ皆がつまずいても、わたしは決してつまずきません』と宣言した。マルコ14:27, 29。ペテロは自分自身の危険を知らなかった。自己信頼が彼を誤らせたのである。彼は自分に誘惑に耐える力があると思っていた。だが、ほんの数時間のうちに試みが来て、彼はのろいと誓いをもってその主を否認した。」『キリストの実物教訓』152頁。

取税人は義とされて自分の家に帰った。

「パリサイ人と取税人は、神を礼拝するために来る者たちが分かれる二つの大きな階級を表している。その最初の二人の代表者は、この世に生まれた最初の二人の子どもの中に見いだされる。」『キリストの実物教訓』152頁。

アベルと取税人は、信仰による義認の象徴である。

取税人は、遠く離れて立ち、目を天に向けることすらしようとせず、胸を打ちながら、『神よ、罪人の私をあわれんでください』と言った。あなたがたに言うが、この人が義と認められて家に帰ったのであって、あの人ではなかった。およそ自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのである。ルカ 18:13, 14

1888年の使命は、黙示録十八章の天使の降下を伴っていた。

「主はその大いなる憐れみによって、ワゴナー長老とジョーンズ長老を通して、御自分の民にこの上なく尊い使命をお送りになった。この使命は、高く掲げられた救い主、すなわち全世界の罪のための犠牲を、いっそう顕著に世の前に示すためのものであった。それは、保証人における信仰による義認を提示し、すべての神の戒めに従うことにおいて明らかにされるキリストの義を受け入れるよう、人々を招いた。多くの者はイエスを見失っていた。彼らには、その神聖な御人格、その功績、そして人類に対

するその不変の愛に目を向けさせられる必要があった。すべての権能はその御手に委ねられている。それは、彼が人々に豊かな賜物を分け与え、無力な人間に御自身の義という値知れぬ賜物を授けるためである。これこそ、神が世に与えるよう命じられた使命である。それは第三天使の使命であり、大いなる声をもって宣べ伝えられ、かつ神の御霊の豊かな注ぎを伴うものである。」『牧師への証』91頁。

ラオディキアへのメッセージ

「A・T・ジョーンズおよびE・J・ワゴナーによって私たちに与えられたメッセージは、ラオデキヤ教会に対する神のメッセージであり、真理を信じると公言しながら、なおも神より与えられた光線を他の人々に反映しない者には、わざわざである。」The 1888 Materials, 1053.

後の雨のメッセージ

「後の雨は神の民の上に降るのである。力ある御使いが天から下って来て、全地はその栄光によって照らされるのである。」『Review and Herald』1891年4月21日。

ニューヨーク市と9・11

「さて、わたしがニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という話が出ていますか。わたしはそのようなことを一度も言ったことはありません。わたしは、そこに大きな建物が幾階にも幾階にも建て上げられていくのを見ながら、こう言ったのです。『主が立ち上がりて地を激しく揺り動かされると、なんと恐るべき光景が展開することでしょう。そのとき、黙示録18:1-3の言葉が成就するのです。』黙示録第18章全体は、地上に臨もうとしていることについての警告です。しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかに関して、わたしには特に示された光はありません。ただ、いつの日か、そこにある大きな建物が、神の力の回転と転覆とによって打ち倒されるであろうことを知っているだけです。わたしに与えられた光によれば、滅びはこの世に迫っています。主のひと言、その強大な力のひと触れだけで、これらの巨大な建造物は倒れ落ちるでしょう。わたしたちには想像もできないほど恐ろしい光景が起ころのです。」Review and Herald, 1906年7月5日。

取税人ペテロは、信仰によって義とされる魂を表している。そして、信仰による義認は第三天使の使命であり、それはラオディキアへの使命であって、9/11に到来した。そのとき、ニューヨークの大いなる建物群が倒壊し、黙示録18:1-3が成就したのである。それから後の雨が降り始め、十四万四千人の印する働きが始まった。十四万四千人の印する時の終わりにおいて、黙示録十八章の御使いが大天使ミカエルとして降臨し、三つの試みによってペテロを復活させた。第一の試みは2023年12月31日に始まり、ダニエル十一章十四節において幻を確立する力がローマであるという根本的真理を表していた。その幻はハーゾーンの幻であり、預言の外的な系統を表しているが、それについてソロモンは、それが生か死であると言っている。

[ハーゾーン]の幻がないところでは、民は滅びる。しかし、律法を守る者は幸いである。箴言 29:18。

ペテロの第二の試みは、シスター・ホワイトが最初の幻の中で示したように、信仰によって至聖所に入ることを要求する神殿の試みである。そこにおいて彼女は、十戒の他の九つの戒めの上に、第七日安息日の戒めが輝いているのを見た。審判の開始におけるその教理は、審判の終結の時期である終末において、他の預言的教理の上に輝く受肉の教理を表している。罪を知らなかった神なるキリストが、墮落した罪深い肉を御自身に取られたという受肉は、さまざまな象徴によって表されている。最も重要なのは、七つの時の教理である。七つの時の教理は、ミラーの預言的発見のアルファであり、またそれは一八五六年において、ミラー派フィラデルフィア・アドベンチズムが七年間にわたって反逆し、一八六三年にラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会となったミラー派史のオメガの教理を表していた。

エゼキエル三十七章の二本の棒は、北王国と南王国に対する二つの二千五百二十年の裁きを表している。北王国は人間の肉を表し、南王国はキリストの思いと結び合わされるように設計された思いを表している。したがって、神性は人性と結合することになる。これが、簡略化された表現における受肉の教理である。七つの時は、ミラー派の歴史のアルファでありオメガであり、そしてそれが受肉を表すように、それはまた、一八四四年におけるアルファの安息日教理に関連して、セブンスデー・アドベンチストの歴史のオメガでもある。一方は第七日安息日のしるしであり、他方は第七年安息日のしるしである。

ペテロの名はパニウムにおいて改められるが、これは、選ばれた民との第一の契約に関するアブラハムの表象における第二の段階であり、ペテロもまた、その第二の段階において、選ばれた民との最後の契約の代表者となる。これは第十一章から第二十二章に至る章の系列における第二の段階であり、また、ペテロ、ヤコブ、ヨハネが他の弟子たちから離れてイエスと共に行った三度のうちの第二回であり、さらに、天の父が語られた三度のうちの第二回でもある。ネロの線はラフィアの戦いとパニウムの戦いととの中間点で終わる。というのは、それは、紀元前457年と1776年に始まった他の二つの250年の期間と一致するからである。紀元前457年は紀元前207年に終わり、1776年は2026年に終わる。ペテロは、紀元前207年、2026年、313年、そして、ラツパの祭りとして表象されるろばを解くことの第三の、かつ試金石となる試験に先立つ神殿の試験に位置している。

ペテロの試みは、キリストに従って至聖所へ入ることであり、彼の働きは、ナッシュヴィルの火の玉に関する訂正されたメッセージを正し、次いでそれを宣べ伝えることである。ペテロによるナッシュヴィルの火の玉のメッセージは、最初に高間で提示され、その後神殿において提示されたペンテコステのメッセージである。彼は、ナッシュヴィルの火の玉の特定と、ラフィアの戦いの成就とを、パニウムの戦いと関連づけて提示するが、このパニウムの戦いは第十六節の日曜法においてアクティウムの戦いとなる。第十六節の日曜法は、第四十一節および第二十二節の日曜法でもある。これら三つの節は、教皇制が西暦538年に支配権を握り、オルレアン第三公会議において日曜法を制定した第三十一節とも一致する。第三十一節へと導く諸節は、西暦538年の日曜法へと導いた道標を示しており、間もなく到来する日曜法に先立つ歴史を予型している。

キティムの船が彼に向かって来るので、彼は失意し、引き返して、聖なる契約に対して憤りを抱く。彼はそのように行い、再び戻って、聖なる契約を捨てる者たちと結託する。軍勢は彼の側に立ち、力の聖所を汚し、常供の燔祭を取り除き、荒らす憎むべ

きものを据える. ダニエル 11:30, 31.

「キッテムの船」はヴァンダル人を表しており、彼らはまた黙示録第八章における第二のラッパとしても表象されている。ローマの漸進的な衰亡は、コンスタンティヌスが帝国を東西に分割した西暦330年に始まった。彼はその後、それをさらに三人の息子たちに分配した。アクティウムの戦い以来、無敵であったローマ帝国は、その時、二つの部分に分かれ、次いで三つの部分に分かれ、その後、黙示録第八章の最初の四つのラッパは、西ローマを476年に終焉へともたらした敵の猛攻を表していた。コンスタンティノープルにおける東ローマは、第五のラッパおよび第六のラッパの初めまで存続したが、これらはまた第一の災いおよび第二の災いでもある。第一の災いの百五十年の時の預言は、第二の災いの時の預言が始まった日に終わった。その日は、1453年におけるオスマン・トルコ人によるコンスタンティノープル陥落の日であった。

バビロンは一夜にして倒れた。あるいは、まずキュロスが川の流れをそらさなければならず、それには一定の期間を要したではないか、と論じるかもしれないが、それでもバビロンの陥落は一夜のうちの出来事であった。これに対して、ローマの没落は一一二三年にわたった。それらの年々には、帝政ローマの漸進的な滅亡を描写する、特定の預言的道標が含まれていた。そして、異教帝政ローマは、五三八年に聖書預言の第五の王国として教皇制を王座に据えるその働きにおいて、合衆国を予型している。教皇制は、ダニエル書十一章十六節のサンデー・ローにおいて王座に据えられる。合衆国の働きを予型する道標は、異教ローマの漸進的滅亡の道標の中に示されている。

キティムの船はローマにとって財政的災厄を表していた。というのも、ヴァンダル族の海軍が地中海の航路に甚大な破壊をもたらしたからである。終わりの日において、イスラムは地の王たちにとって財政的災厄として描かれている。ヴァンダル族とその船は第二のラッパの勢力であり、三つの災いはイスラムのラッパの勢力である。第一はアラビア、第二はトルコ、そして第三は世界的規模のものである。

船は経済力の象徴であり、聖書においてキティムの船は経済力の最高の象徴である。これらの船は海のただ中で怒れる東風によって沈められるが、聖書においてイスラムは東の子らである。イスラムが預言的出来事の連鎖の中で言及されるとき、それは経済危機を生じさせる。イスラムはバラムとともに雌ろばとして表されるが、これは聖書においてイシュマエルが最初に紹介される箇所「野生の人」と訳されているヘブライ語である。預言的な水準において、イシュマエルはイスラムの父である。これはイシュマエルの父がアブラハムであることを否定するものではなく、イシュマエルの十二の部族が聖書において東の子らとして知られるようになるのである。

終わりの日において、偽預言者としてのアメリカ合衆国の象徴であるバラムは、自分のろばを三度打つが、これはイスラムによる三度の打撃を表している。9・11はその打撃の第一であり、争いの荒れ狂う東風の中を東から上って来る封印の天使の到来を画した。イスラムによる第二の打撃は二重である。なぜなら、第二の段階は倍加を示すからである。2023年10月7日、イスラムは不意に文字どおりのイスラエルを打ったが、テネシー州ナッシュビルが不意にイスラムに打たれるとき、霊的イスラエルは打たれることになる。バラムの物語において、第二の道標は二つのぶどう園の間にあり、万軍の主の二つのぶどう

園とは、古代の文字どおりのイスラエルと、現代の霊的イスラエルであるアメリカ合衆国であった。バラムの第三の道標は、ろばが語ったときであった。そして、9・11に始まった十四万四千人の封印の時の終わりを示す「語る」という象徴は、アメリカ合衆国が竜のように語る日曜法である。黙示録11章の大地震はその日曜法であり、そこでは第三の災いがすみやかに来たり、アメリカ合衆国と、ろばと、ゼカリヤが語るのである。

バプテスマのヨハネの父は、神殿で奉仕するためにダビデが設けた二十四の祭司組のうち、第八の組に属していた。祭司ゼカリヤは、不信仰のゆえに、息子ヨハネの誕生まで口がきけなくされたが、彼は数字の八の象徴（祭司職の象徴）でもある。日曜法の時、バプテスマのヨハネによって表される祭司たちの最後の世代は、その父ゼカリヤによって表されるように、語るであろう。キリストはヨハネをエリヤであると示され、エリヤの終末時代の使命は、ゼカリヤとヨハネがそうであったように、父と子の関係によって表されている。ヨハネはエレミヤによって予表されており、エレミヤは、もし彼が立ち返るなら、神の口となるであろうと告げられていた。

エレミヤは2020年7月18日の最初の失望を嘆いていたのであり、もし彼が立ち返るなら、日曜法の時に、遅れていたが終わりには「語る」ことになっていたハバククの預言的メッセージを提示した際、神の口となるのであった。エレミヤ、したがってヨハネ、したがってペテロは、イスラムのろばが語るその時点、そして合衆国が竜のように語る時に、ハバククのメッセージを語るようになっていた。

パニウムであるカイサリア・ピリピにおけるペテロは、「山」というウェイマークに先立つ時期にあるのであり、その「山」は、十字架、すなわち日曜法へと至る凱旋入城によって続けられるはずのものであった。その時期はパニウムの戦いによって表象されており、その戦いは教皇と、その代理権力であるアメリカ合衆国の勝利をもって終結する。パニウムは三つの代理戦争のうちの第三のものであり、その第一のものは一九八九年のベルリンの壁において終結し、最後すなわち第三の代理戦争は、政教分離の「壁」が取り払われることによって終結する。一九八九年は、第二次世界大戦の終わりに始まった「冷戦」と呼ばれる代理戦争の頂点を画し、パニウムは、アクティウムの戦いによって表象される第三次世界大戦において終結する冷戦を表している。三つの代理戦争における第一および第三のウェイマークの間には、十一節および十二節におけるラフィアの戦いによって表象されるウクライナでの文字どおりの戦争がある。

パニウムは、1989年の終わりの時に終結し、第二次世界大戦の終結時に始まった冷戦によって表象されるように、第三次世界大戦へと導く冷戦である。第十節と1989年、第十一節および第十二節と2014年に始まったウクライナ戦争、そして第十三節から第十五節とMAGA主義とグローバリズムとの間にある現在の冷戦によって表象される道標において、教皇制とアメリカ合衆国との同盟を画した三人の大統領がいた。

ロナルド・レーガンは、悪魔的なファティマの預言という観点において保守的な教皇であるヨハネ・パウロ二世と秘密同盟を結んでおり、そしてそれは第十節の預言的歴史と結び付いている。オバマの大統領職は、第十一節および第十二節におけるラフィアの戦いの歴史と一致している。その大統領任期中には、第二の道標が倍加を示しているため、象徴的な教皇が二人いた。第十三節から第十五節の第三の道標において、その教皇は合衆国

出身の最初の教皇である。私たちは当初、教皇レオはヨハネ・パウロ二世によって予型されたような保守的な教皇であると想定していたが、三重の適用という預言的適用の下で当てはめると、第三の道標は最初の二つの成就の特徴を備えているので、レオは保守的なヨハネ・パウロ二世であり、彼こそは、オバマの任期中にウォークな教皇フランシスコのために辞任した前異端審問局長、ベネディクト十六世なのである。

第一の代理戦争は一節によって、第二は二節によって、そして第三は三節によって表されている。1989年に終結した冷戦は第二次世界大戦の終わりに始まり、アクティウムの戦いによって表される第三次世界大戦は、パニウムの戦いによって表される冷戦の終わりに始まる。三つの世界大戦は、三つの代理戦争と同様に、預言の三重適用に伴う原則によって支配されている。第二次世界大戦の終結は、1945年のルーズベルトから数えて第八代の大統領、すなわちレーガンにおいて終わる冷戦を開始した。1989年という終末の時に、レーガンはトランプ（彼は七人のうちの一人である）に至る八人の大統領の連なりを開始した。トランプの冷戦は、彼が大統領選への立候補を表明してグローバリストたちをかき立てた2015年に始まり、ダニエル書十一章二節の成就となった。その冷戦は日曜法において終わるが、それはアクティウムの戦いであり、ローマが至高の支配を行う前に直面する第三の障害である。

ルーズベルトはレーガンに至るまでの八人の大統領の始まりであり、その系列はさらにトランプに至るまでの八人の大統領の始まりでもあった。ルーズベルトは第二次世界大戦を画する存在であり、彼は一九四五年四月十二日に死去し、その後、トルーマンが大統領であった時に、ヨーロッパ戦線は五月八日に終結し、太平洋戦線は九月二日に終結した。ヨーロッパ戦争は主として陸上の戦いであり、太平洋戦争は海上の戦いであったが、それはちょうどパニウムが陸上の戦いを表し、アクティウムが海上の戦いを表すのと同様である。最初のものが最後のものを例証しており、この八人の大統領の系列は、ダニエル書十一章二節および三節の証言の上に、また第八のものが七つのものの一つであるという謎の上にも確立されている。黙示録十三章の地の獣の歴史の始まりにおける最初の二つの大陸会議においては、大統領の任期は七期であった。その歴史においてジョージ・ワシントンは総司令官として任命された。最初の正式な大統領として、第二回大陸会議におけるワシントンの任命は、まさにその初めにおいて、七人の大統領の中の第八としてのワシントン象徴している。

最初の大統領は最初の七人の大統領のうちの第八であり、最後の大統領は七人のうちから出る第八である。祭司ゼカリヤは、ろばが語る時、また地の獣が語る時に、ヨハネの誕生に際して語る。ここにおいて、ハバククの幻もまた語る。日曜法における十四万四千人の旗印を予表するヨハネの誕生は、祭司ゼカリヤの最後の世代である。ゼカリヤは二十四の祭司の組のうち第八の組に属していた。日曜法において、イスラム教（ろば）が語り、合衆国が竜として語る時、ゼカリヤ（祭司たち）は語る。その道標において、教皇制の致命的な傷は癒やされ、彼女は七人のうちから出る第八となる。トランプもまた七人のうちから出る第八であり、日曜法において最終的に完成される獣の像を形成するのは彼である。そのとき、十四万四千人の祭司職は神の口となり、第三天使の大いなる叫びにおいてそのメッセージを語る。その祭司職は、七つのうちから出る第八の教会である。

ルーズベルトは、1989年における終わりの時へと至る八人の大統領の始まりであり、彼はまた、第二次世界大戦から、1989年に終結する冷戦への移行を画する。トルーマン大統領はルーズベルトに続き、第二次世界大戦を構成していた地と海との戦いが終結した時に統治した。大統領として、トルーマンは、1945年10月24日に国際連合が発足した時に統治していた。ルーズベルトとトルーマンとの関係は、1945年という年によって確立される。両者はその年に大統領であり、またその年に、第二次世界大戦であった二重の戦争が終結し、国際連合が形成され、冷戦が始まった。

1989年にも、1945年と同様に二人の大統領がいた。ロナルド・レーガンとジョージ・ブッシュ（父）である。レーガンは冷戦を終結させ、ジョージ・ブッシュ（父）は、1990年10月1日に「第四十五回」国連総会で演説した際、「新世界秩序」を築くことについて語り、自らが何よりもまずグローバリストであることを公に表明した。その演説の中で彼は次のように述べた。「これらの暗い機構を、それが属する暗黒時代の中に置き去りにし、新世界秩序と長き平和の時代へと向かう歴史的運動を完成させるべく前進することは、われわれの手の中にある。」

この演説において、ブッシュはこの概念を、冷戦後の協力、湾岸危機（イラクのクウェート侵攻）、国連の強化、ならびに法の支配に基づく諸国家の新たなパートナーシップと結び付けた。ブッシュは、「新世界秩序」という語句を、その数週間前の1990年9月11日に行われた米国議会上下両院合同会議における演説において、初めて広く普及させた。

ブッシュが国連演説を、最近の冷戦終結を「暗黒時代」という観点で位置づける文脈の中に置いたという事実に注目しなさい。暗黒時代は1798年の終わりの時に終結し、ブッシュは1989年という終わりの時にいた。彼が「新世界秩序」という語句を最初に造語した時、イスラムは諸国民を怒らせており、その演説は9/11に行われたことに注目しなさい。ルーズヴェルトからカーターまでは八人の大統領であり、レーガンからトランプまでも八人の大統領であった。トランプは最後の大統領であり、彼は最初の大統領によって予表されていた。その最初の大統領は、最初の七人の大統領のうちの第八番目であった。

1798年における終わりの時は、教皇制の致命的な傷を示しており、教皇制こそが暗黒時代のあいだヨーロッパの王たちを支配していた勢力であった。黙示録第17章において、その関係は、獣の上に乗る、かつそれを支配している淫婦として描かれている。1798年にはヨーロッパの王たちの支持が取り去られ、獣は死んだ。1799年には教皇は流刑のうちに死んだ。1798年と1799年は、その最も完全な意味における終わりの時を表している。ちょうどキリストの時代における終わりの時が、パプテスマのヨハネの誕生、そしてその六か月後のキリストの誕生によって画されているのと同様である。1990年のブッシュの発言は、終わりの時を画する二人の大統領のうちの第二の者としてのブッシュを示しており、また竜の力であるグローバリズムへの動きを示している。ブッシュの象徴性は、合衆国が竜のように語ることによって聖書預言の第六の王国として終わるとき、日曜法に向かう一歩を示している。日曜法において、合衆国は国際連合の声となる。まさにその文脈において、イスラムは諸国を怒らせており、9・11が画されている。1990年9月11日、最初のブッシュが議会に対してそのグローバリストの構想を語ったとき、彼は、2001年の9・11においてイスラムが再び諸国を怒らせる時を予表していたのであるが、そのときの大統領は最後のブッシュであった。

八人の大統領の最初の者であるルーズベルトは、1945年に第二次世界大戦の終結を画し、その次の大統領が国際連合の到来を導き入れた。八人の大統領の最初の者であるレーガンは、1989年に冷戦の終結を画し、その次の大統領が国際連合を推進した。八人の大統領の最後の者は、2015年に自らの立候補の意思を表明したときに始まった冷戦を終結させ、第三次世界大戦を開始するであろう。彼は、聖書預言の第六の王国を聖書預言の第七の王国（国際連合）の頭へと移行させ、その後、日曜法においてその王国を獣に与えることに同意するであろう。

第二次世界大戦が陸戦と海戦とから成っていたのと同様に、最後の大統領もまた冷戦を有し、それはアクティウムの海戦へと導くパニウムの陸戦によって表されている。日曜法において、2015年にトランプがグローバリストたちをかき立てることによって始まったその冷戦は、第二次世界大戦の陸戦と海戦によって表象される第三次世界大戦へと変わる。第二次世界大戦の終結時、次の段階は国際連合のグローバリズムであったが、それはレーガンとブッシュの時代における冷戦終結時の場合と同様であった。まず合衆国が日曜法において終わり、それからブッシュの「新世界秩序」が第七の王国を導入し、その王国は直ちに自らの権威を第八の王国に与えることに同意する。

最初のブッシュと最後のブッシュとは、前者が9/11に際して連邦議会で「新世界秩序」を宣言したことと、後者が2001年愛国者法を制定したこととによって結び付けられている。これら二つの道標はいずれも、イスラムが諸国民を怒らせるという文脈の中に置かれている。

これらの事柄については、次の記事で引き続き扱うことにする。